



東京印刷同業組合時代の回顧

『東京同業組合』

(1) 東京同業組合

史談会開催日

昭和46年(1971年)9月28日

本日、印刷史談会で過去の歩みについて語る機会を与えられたので、明治・大正・昭和の3代にわたって、印刷界で経験してきたことなど思い出すままに述べたいと思います。

私は現在85歳となりますが、今では遠く過ぎ去った時代に、私とともにこの印刷界で活躍した先輩同僚の多くの人々が、現在ほとんど故人になってしまわれ、同業組合時代に活動していた知友も、今では大変少なくなってしまったことを誠に残念に思います。

まず話の順序として、私の生い立ちから、東京へ出てきて、印刷界に入った当時の事情、報文社印刷所のことや、独立して康文社印刷所を運営していた時代のこと、さらに東京印刷同業組合の代議員や、評議員、副組長、時報の編集委員として、印刷で経験してきたことなど、大体年代順にいろいろお話し致したいと思います。『時報』は印刷組合の機関誌で月刊でありました。なお身辺雑事も少し述べてみたいと思います。

幼・少年時代

私は明治19年8月28日、千葉県山武郡白里村四天木の農家で、父吉原喜代松、母さだの二男として生まれました。8歳にして村立白里尋常小学校に入学いたしその頃から父より孝経・四書の素読を受けました。続いてわが白里村には高等小学校がなかったので、隣村の福岡村立福岡高等小学校に入学し、往復3里半余の道を通い、卒業しました。成績は毎学年とも優等でありましてほとんど学年ごとに級長を命じられました。

その後、旧佐倉藩士島田先生の私塾に通い、漢籍の素養を身につけ、かたわら早稲田大学出版部発行の講義録や、普通文官養成講義録などを読みながら、密かに青雲の志を抱いておりました。

■ 語る人

吉原良三氏

(有限会社昌美堂印刷所顧問)

■ 【吉原良三氏の略歴】・

・大正時代から終戦当時まで約30年間、印刷界の第一線で活躍。現在86歳。明治40年の丸の内の報文社印刷所に入る。大正10年に早稲田鶴巻町に康文社印刷所を創業。一方、東京印刷同業組合の代議員に大正年代から就任、昭和4年に評議員に選出され、同時に組合の時報編集委員となる。また、東京印刷同業組合副組長、印刷協和会の副会長、日本印刷文化協会東京支部理事など幾多の要職につき業界発展に貢献。昭和20年、工場設備一切を陸軍需品廠に譲渡。戦後印刷界から引退。現在は「吉原易断所」を開所、有限会社昌美印刷所顧問。なお、著書に「趣味の旅」「名所と山水」「孝経心解」の3冊がある。

私の青年時代

明治 39 年徴兵検査を受けました結果、佐倉歩兵連隊の甲種合格でしたが、くじ逃れで入営を免れました。

たまたま明治 40 年頃、沢田久吉氏（沢田己之助君＝印刷図書館長＝の祖父）の世話で、報知新聞社の社主三木善八氏に紹介されて報知新聞社に入社したのが、明治 40 年 4 月 4 日でありました。私は入社と同時に重役頼母木桂吉氏の配下として、工務部の事務を担当することになりました。

明治 42 年 55 日、三木善八さんの直営する報文社印刷所に勤務を命ぜられ、その忠勤精励を認められ若くして業務執行社員となり、その経営を一任されたのであります。

この報文社印刷所は、従業員 80 名位もいて鑄造機 5 台、文選、和文植字、解版、欧文植字、印刷機械 7 台、鉛版、断裁室なども整っており、当時としても中クラスの活版工場で、書籍や月刊雑誌や株式旬報などの印刷を主としておりました。

(2) 報文社印刷所の沿革

この報文社という印刷所は、報知新聞社の社主三木善八氏の経営であって、歴史は大変に古く、東京活版印刷業組合が明治 18 年に設立した時の名簿にも、日本橋区薬研堀 32 番地に、薬研堀活版所三木善八として加盟しています。

この三木さんの報知新聞は明治 5 年に発足して、だんだんと発展して、明治 26 年には薬研堀から京橋三十間堀に移り、明治 38 年の日露戦争時代に丸の内有楽町 2 丁目 1 番地に移ったのであります。この場所は有楽町駅の傍、現在そごうデパートになっている国鉄のガードに沿った三角形の土地です。

報知新聞は創刊以来、大隈重信さんの援助もあり、箕浦勝人、添田寿一、町田忠治、犬養毅、頼母木桂吉氏など憲政会の領袖が社長または役員として憲政会の色彩の濃い論陣を張っていたので、当時の報知新聞は朝日新聞や東京日日新聞よりも発行部数が多い一流新聞でした。



なお、この新聞の読者が激増したのは、頼母木桂吉氏が新聞研究のため米国へ派遣され、帰朝後他社に先がけ初めて夕刊を発行したのが成功したのです。これは私が入社した頃でした。

丸の内界隈

私が新聞社に入った頃は既に丸の内に移って間もない頃でした。その頃の丸の内界隈は丸の内の一部分の地に三菱の赤煉瓦の建物をはじめ、その他諸会社の宏壮な鉄筋コンクリートの建物が点在するといった、寂しい状態でありました。

また、日比谷公園から北へ大手町を経て神田橋までの東京電の路線に沿う東側一帯は、いわゆる三菱が原という草茫々たる原野で「東京駅」建設の予定地とされていたが、いつその実現を見られることや、想像もつかぬ荒野原でありました。

同業組合の発足

大正6年5月、東京印刷同業組合では新しい組合法に基づいて、初めて代議員選挙が行われました。その時三木善八氏が代議員に当選したので、私は三木氏の代理として組合の会議に出席したのですが、その時の組合長は玉置源太郎、副組長野村宗十郎、同高橋秀吉、組合会議長河合辰太郎、副議長鈴木正平、評議員は杉山義雄氏など15名でした。

組合では、いよいよ陣容が整ったので定款を改定する必要となり、定款改正委員長に河合辰太郎氏をはじめとして13名の委員が選ばれました。私もこの委員の一人に加えられました。この時の書記長は秀英舎出身の豊原又男氏でした。

報文社の解散

報文社印刷所は、大正9年8月1日午後1時鑄造室の煙突から出た火で全焼しました。

その後、再建準備にかかったのですが、報知新聞社のほうでその焼跡の敷地へビルを建設する計画があり、この報文社は結局解散することになりました。

康文社印刷所の創立

ここにおいて私は、報文社主三木善八氏の諒解を得、独立する決心をして、報文社再建準備の資材の一部分と、残っていた従業員や得意先を引き継いで、牛込区早稲田鶴巻町107番地に『康文社印刷



所』を創業した。それは、大正 10 年 3 月であった。時に私は 35 歳でありました。

康文社印刷所は、報文社と同様に出版業者を主要な得意とする方針なので、組版設備は鋳造（最初は手回しの活字鋳造機 3 台）、文選と和文植字、欧文植字など 10 数台。印刷は四六判、菊判の全判印刷機と、菊 8 頁とフォート印刷機など 8 台の設備で始めたのであります。

(3) 関東大震災

大正 12 年 9 月 1 日午前 11 時 58 分、関東大震災があり、東京市の下町方面はほとんど焼失し、印刷業者の約 8 割が罹災したのであります。

康文社印刷所は早稲田鶴巻町にあったので、幸いにも焼失もせず、損害もゲラやケースが倒れた程度でありましたから、10 日くらいで作業を開始することが出来、注文が殺到して非常な繁忙を来したのであります。

その後、設備や建物を徐々に拡張して、従業員も 50 名位から 80 名位までに発展したのであります。

昭和初年に入り林栄社（林栄三氏）が活字鋳造機（自動式）を製造して、活字の 1 回限り使用の経済性を強調して来たものです。活字業者は一般に、解版した活字をもとの文選ケースへ返す作業が 1 日 10 時間作業の内拾いは 7 時間位、返しは 3 時間位かかったと思います。この返す時間の無駄を省いて、能率の良い鋳造機で鋳込み、すべて高低のない新活字で組めば、印刷のムラ取り時間も少なく、合理的だというわけです。

私もいち早くこの利点を考え他社に先んじてこれを設備しましたが、この自動鋳造機は 1 台 3 千円であった。四六全判の活版印刷機が 1 台 4 千円位で買った時代ですから、値段もかなり高いと思った。しかし、使ってみると能率も良いので次々と増設して、数年の間に 5 台位に増設しました。

また一方、活字書体も従来の秀英形とか築地形を改良して、細形



タイプの書体を新刻する傾向が、神田の精興社をはじめとして漸く現われはじめたのです。当時としては優秀な彫師を見つけることが最大の難関でありました。

その頃、精興社で印刷して岩波書店の本に注目して探ったところ、その活字を彫ったのは君塚という人であることを知ったので、ともかく君塚さんに懇請したところ私の熱意が通じてか同氏の一番弟子である朝倉鳴樹という人を世話してくれました。

康文社では、この朝倉さんを専属にして、まず9ポ、それから5号、8ポ、6ポ、12ポ、4号までの活字を順々に彫ってもらいました。毎日少しずつ彫ってくる種字を拡大鏡で検査するのが、その頃の私の日課のようにしていました。

母型は、岩田百蔵氏が創業当時から懇意にしていたので、すべて岩田母型製造所に頼み、母型を造り改鋳していったのです。新旧活字の入れ替えは大変な仕事であったのですが、全部新しい書体活字の入れ替えなどには、約3年以上の日時をかけて完成したのであります。

この結果、康文社の活字の評判は大変良くなり、金原商店、南江堂、丸善、国民文庫刊行会、光風館、中興館、東京開成館、有斐閣、岩松堂、春陽堂、有精堂、斯文会、雄山閣、電機学校、大学書林、コロナ社、大日本国民中学会、桜楓会、日本赤十字社、その他一流出版社の図書や雑誌や諸会社、証券会社などの注文を受けたのであります。

また和文活字に限らず、欧文活字についても力を注ぎ、丸善の洋書目録をはじめ、中学校や高等学校の教科書、語学参考書など、多くの仕事をしていましたから、国内で手に入る各種の書体はもちろんですが、直接、アメリカやドイツの活字会社から輸入して、新しい外国の書体を充実してきたのであります。この当時、欧文植字工も8名から10名位いて、英語に限らず、ドイツ語、フランス語、ギリシャ語等の母型も各種のポイントを揃えて、この方面でも、東京では屈指の設備を整えたものであります。

東京印刷同業組合支部設立

大正11年に、東京印刷同業組合に、初めて支部制度が出来て市内15区に支部長が決まった。この時、牛込区の支部長は日清印刷株式会社（現在の大日本印刷榎町工場）の小久江成一氏であった。

続いて、各支部から代議員選挙があり、牛込区からは、秀英舎、

日清印刷株式会社、康文社吉原良三の3名が選ばれて就任しました。

東京工場協会の設立

昭和初年頃から労働運動が激しくなり、各地に労働争議が頻発したので、昭和5年10月に、東京工場協会が設立された。東京市内の各種工場6千5百を会員組織として、会長は警視總監丸山鶴吉氏であった。当時、工場監督権は警視庁工場課であり、各警察署毎に支部が生れ、私は早稲田支部長に就任しました。

昭和6年には、満州事変が勃発し、次いで支那事変にまで発展すると共に、国民精神総動員運動や、昭和15年には、大日本産業報国会が生れ、各種の統制令が出て、統制経済となりようやく、内外共に戦時色が濃厚となってきました。

昭和16年12月8日には、ハワイ真珠湾の奇襲攻撃によって、ついに大東亜戦争に突入したのであります。

従業員の中からも、軍需工場への徴用や、赤紙による軍隊への応召等により、印刷工場の若い者は続々と減って行き、印刷機械が8台位あっても、2台しか動かせない状態となりました。

米機初めての東京空襲

昭和17年4月18日正午頃、初めて東京に米機が侵入して、早稲田方面に焼夷弾の空襲がありました。この時、康文社印刷所の事務所と工場に、4発の焼夷弾が落ちましたが、これは従業員の活動で消し止め、大事に至らなかったのですが、付近の民家からは火災が発生したが間もなく消し止めたのであります。これは、空襲というわが国最初の経験でありましたので、NHKから頼まれ、私はラジオで、この体験を全国放送したことがあります。

昭和19年から20年頃の状況

昭和19年1月には、長男平八が応召されて『溝ノ口』に入隊、直ちに北支に派遣されたので、家族の者は、しきりにその安否を気遣っていました。

昭和19年11月には、神田美土代町の一帯が空襲を受け、この時、同業三秀社など、あの近辺が焼夷弾のため灰燼に帰し、年が明けて20年に入ると空襲はいよいよ激しくなり、誰の目にも敗戦の色が濃くなって行きました。



(4) 東京都第6次強制疎開発令

康文社印刷所は、鶴巻小学校の直ぐ正門前にあったので、東京都第6次強制疎開の対象地区となり、工場建物を取り壊して、空地となった一部分を、軍へ提供しろという事になりました。その頃、軍のほうから民間の印刷設備を買い上げて、山間部に移して軍専用の印刷工場を設ける計画があり、康文社印刷所の設備は、軍が望む最適のものとして、軍から再三譲渡の交渉を受けていたのであった。

ところが、一方において東京のほうから、次の命令書が飛び込んで来たのである。

譲渡 号

譲渡命令所

住所 鶴巻町一〇七

指名 吉原良三

右ハ其ノ所有ニ係ル左記建物並ニ附属工作物ヲ昭和二十年三月二十四日限り東京部長官ニ譲渡スベシ 右防空法第五条ノ十ノ規定ニ依リ命令ス

昭和二十年三月二十三日

東京都長官 西尾寿造

牛込区役所印

この命令書は如何に戦時中とは言え、1日以内に工場の設備を取り片づけて、土地を提供せよとは、狂気の沙汰と言おうか実に横暴不遜で、勝手極まる命令書と言うべきである。

ここにおいて、康文社印刷所としては、この急迫状態では営業を続けることにつき、深思熟慮、思い悩んだのでありました。

折しも、昭和20年4月13日の夜に入り、東京都内山ノ手方面、新宿区を中心に、米機の激しい空襲があり、私の西大久保2丁目の住宅も、この夜の11時頃全焼して、多大の損害を受けました。

昭和20年5月10日、陸軍需品本廠市ヶ谷出張所から再三の懇望を容れて、康文社印刷所の工場設備を譲渡する契約書を交換して、その引渡しを終了しました。

思えば、康文社印刷所は、創業以来25年間、営々として築き上



げた事業を、このような事情で、一応事業を休止するという、止むなきに至った次第であります。その後、間もなく早稲田方面は、この年、即ち昭和 20 年 5 月 25 日に大空襲があり、この地一帯は焼土と化してしまいました。

私はかつて、この康文社印刷所の所有敷地約 5 百坪に、ゆくゆくは、模範的工場を建設する構想を抱いていましたが、戦時体制下のため実現出来なかったことは、遺憾でありました。なお、私は印刷界に対する望みを捨てず、郷里に疎開して、若い時から趣味として研究を続けて来た、易学をもって、世の人に尽くそうと疎開先、現在の千葉県山武郡大網白里町大竹 137 番地に、『開運閣吉原易占所』を開き、人生福祉相談をしながら、今日に至っている。

東京印刷同業組合における活動

大正 15 年 2 月に、組合の代議員に就任してから、組合行政に関係するようになりました。この年の 5 月に、牛込支部が発足したのですが、当時牛込区の支部員は、53 名であったのです。私は牛込支部相談役におされました。

昭和 4 年 5 月の組合会で、初めて、評議員 15 名の内の 1 人として選出されました。この時の組長は杉山義雄氏、副組長鈴木正平氏であった。

またこの年から東京印刷同業組合『時報』の編集委員に選出されて、土屋玉乗、岡千代彦、鷺見知代麿、飯島省一の諸氏と共に、『時報』編集委員として私は同業組合が解散する昭和 18 年 10 月まで、15 年間もの長い間、時報には終刊まで、毎号執筆を続けたのであります。

昭和 4 年 11 月には、東京印刷協和会が発足しました。

東京印刷協和会の発足について

そもそもこの会は、大正 14 年の博文館印刷所の争議があった頃、印刷経営者の結束を図る団体として、東京印刷同志会が生じ、その後、東京印刷連盟会となりましたが、資本家横暴の会だという批判を受けたので、改称することとなり、この改名を私に依頼されたので、私は、東京印刷協和会と命名したのです。この『東京印刷協和会』は中堅以上の業者の親睦団体として、毎月 1 回の例会を始め、地方の旅行会などを催して、戦後に至るまで、長年続いていたのであります。会員は約 30 名でありました。私も、この協和会の幹事をしたり、



あるいは副会長となって、力を尽くしたのであります。なお、この会の地方への旅行地選択は、多くは私が選んだものであります。

(5) 組合事務所の新築

昭和6年、東京印刷同業組合では、それまで使用していた組合事務所が老朽化したので、新しい事務所を建設することになりました。私もこの建設委員の1人として、この建設には何回も会議を開いて協議したものです。当時敷地は93坪・2階建延130坪、坪当り建築費は金98円、総額金1万2千円で出来たと記憶しています。その頃、組合職員も5、6名という人員であり、2階の会議室を始め、部屋も十分のゆとりがあったので、この建築が竣工したあとで、利用方法の一つとして、この事務所の中に『印刷図書室』を開設して、一般の印刷物を陳列して、参考にしようと、計画を発表したこともありました。この時の計画が、時期尚早などの異論もあって、結局実現しなかったことは、遺憾でありました。しかし、この印刷会館の中に『印刷図書館』が出来ていることも、考えてみると、我々が40年前に企画したことが、ようやく実を結んだという感じがするのであります。

日本印刷大鑑の発行

昭和11年には、東京印刷同業組合の、創立25年を記念するため『日本印刷大鑑』の発行計画がたてられ、組長の大橋光吉氏が熱心に動き、私もこの編集委員を委嘱されました。計画を立案したり、又この850頁に及ぶ大冊の校正も、鷺見枝麿、岡千代彦、吉原良三の3人で見たわけです。この間の事情は、当時組合書記をして居られた、牧治三郎さんがよくご承知であろうと思います。この企画から完成まで2年間もかかり、立派な日本印刷大鑑が出来たわけです。

印刷料金標準表を発表

私は、印刷値段の複雑性を多年にわたり憂慮し、無謀競争を防止するため、『印刷料金標準表』の作成を、役員にはかって研究し、昭和14年7月、組合はこれを発表した。

(6) 活字規格統制委員会が設立

昭和14年に入ると、活字規格統制委員会が生じ、吉原良三、高橋与作、長島五郎、青野仙吉、青田伴祐の5氏が委員となり、私がこの委員長でありました。明治以来の号数系と、ポイント系とが混



合しており、これを何とか合理的にまとめようとの見地から、研究を始めたのですが、委員の中にも号数を固執する者、ポイントシステムを主張する者、議論が多かったのですが、私も、我が康文社印刷所において、現場の植字工といろいろ検討したものである。私はこれらの研究の結果、『統一ポイント式』と命名して、この活字新規格表を、時報誌上に発表したり、実体組版見本を提示して能率増進のため、統一ポイント式を強調したものであります。この研究は大体2年ほどかかり、委員会においても、ポイント式に最終決定をしたのであります。この頃、副組長の青木弘さんも、この私が研究提案した『統一ポイント式』活字規格を賛成されたことを記憶しています。しかし、この案も、時局が統制経済に移行する頃で、活字だけでなく、組版には込物や、インテル等の材料が複雑なため折角の案も実現するに至らず、戦争時代に入ってしまったのであります。

東京印刷同業組合副組長に就任

昭和15年には、紀元2600年というお祭り騒ぎもありましたが、この年の11月、私は青木弘さんが副組長を辞任されたあと、組合会の選挙によって副組長に選出されました。時報編集委員も、私と、浜田仙松、小林繁次郎の3人となりましたが、この頃から、用紙の規格が従来の菊判、四六判が廃止になり、A判、B判に変わったのであります。

日本印刷文化協会東京府支部理事に就任

又、戦時体制の国策に添って統制経済が、いよいよ強化され日本出版会が出来たり、日本印刷文化協会の創立という、時代を迎えるに及び、同業組合の解散論が現われるようになりました。この日本印刷文化協会は、昭和16年10月に、上野精養軒で創立総会が開かれ、全国的な統制団体として発足、私は東京府支部の理事に就任、この理事は8名、支部長は佐久間長吉郎さんでありました。この時から印刷業の企業整備が、進められるようになったのであります。

東京印刷同業組合の解散決議

東京印刷同業組合のほうは、昭和17年2月の代議員会において、組長鈴木正平、副組長吉原良三、同土屋玉乗出席、代議員も出席して組合の解散決議をしたのであります。これに伴い同業組合の財産処分問題があり、本部建物をどうするかという問題では、いろいろ意見が出たのであります。当時出された案をご参考までに列挙しますと、

A案 この建物を印刷会館として、博物館的存在として残し支部

旗やその他の記念品、参考図書を常置して、印刷界に貢献せしめよ。

B案 印刷倶楽部の如きものにして、会員組織で維持する、社交倶楽部としてはどうか。

C案 建物を売却して、その売上金を以って組合解散費を支弁し、余剰金を国防献金とすべし。

D案 日本印刷文化協会東京支部へ寄付すべし。

E案 日本印刷文化協会の前途の見通しが、未だ明瞭でないから、当分処分を保留してある時期まで保存すべし。

これらの案が出されましたが、結局は昭和18年の秋、組合解散の際には、この財産処分権を清算人へ、一任することになったのであります。

その後建物は、そのまま印刷文化協会東府支部の事務所とし使い、翌19年11月には、更に強力な統制機関が必要ということから印刷文化協会を解散して、日本印刷産業総合統制組合が生じ、理事長に佐久間長吉郎氏、理事に荻野伊八、田中専一、竹内喜太郎の諸氏が、就任した。

昭和20年8月の終戦によって、戦時体制団体は解散し、22年には、印刷工業協同組合東京都印刷紙製品工業会等々と変遷して、日本印刷工業会や、東京都印刷工業会の組織となったことは、皆様よくご承知のことと思います。

この同業組合の建物も、幸いに戦禍を免れて残り、昭和37年には、地上7階建の立派な印刷会館ビルを建築するため、昭和6年に竣工した、思い出深い木造2階建の建物も、30年の使命を果たして、取り壊されたのであります。

今から40年前に、組合事務所を作る時、建築委員として努力した私、吉原良三が今、この日本印刷会館に来て、このビルを建築するため、山田三郎太さんや、高橋与作さん、井関好彦さんが、大変尽力されたと承わり、深く感謝の念に堪えません。と同時に、隔世の感を、しみじみと感ずるのであります。



休業届提出

届 書

昭和廿一年三月廿日附『読売報知』紙上の貴広告第二項に依り左記御届申上候

一、弊社ハ去ル昭和廿年三月廿一日附東京都第六次強制疎開命令先ニ同年五月廿五日ノ戦災ノ為事業休止致候へ共将来復活ノ意志有之候ニ付御諒承被下度此段及届出候也

昭和廿一年三月廿日

東京都杉並区井荻一ノ三七番地

株式会社康文社印刷所

取締役社長 吉原良三

東京都京橋区新富町二ノ廿三番地

東京都印刷業統制組合御中

右の通りの休業届を出してある。廃業していないまま現在に及んでいるのであることを、ここに明記しておく。この商号は吉名である。

著書出版

私は康文社印刷所経営 25 年の期間中、健康増進を図るため、同行の旅友と『東京アルコウ会』『東京旅行クラブ』を結成して、その幹事やリーダーとなって探勝した。旅行記は、次の 2 巻である。

実地探勝趣味の旅行（昭和 6 年 5 月 3 日）

実地探勝名所と山水（昭和 11 年 1 月 5 日）

右の外、孝道を奨励するため次の自著がある。

詳註孝経心解（昭和 14 年 3 月 3 日）

右の 3 冊は康文社の出版で高評数版を重ねた。

昭和 10 年 4 月、長男吉原平八は、昭和第一商業学校入学、昭和 15 年 3 月卒業まで、父として私は、同校生徒保護者会から、会長に選任されて就任しました。なお、同校校長から名誉会長として、推薦されました。

